

慰靈碑の向こう側

内田修道

今から三年前の一九九七年一月、埼玉県入間郡越生町にある旧梅園村地区の史跡を自転車で廻り始めた。それまで担当のI氏に車で案内してもらって越生町の一応のイメージはあったもののあやふやなものであった。JR八高線の越生駅から自転車で二〇分位(？)、山間に入った所が旧梅園村小杉地区である。現在は梅園で知られ、花の季節にはハイカーで賑わう。その梅園の入口と道路を挟んだ反対側の山沿いに村社梅園神社がある。この境内には幾つもの碑があるが、その中の一つには

【殉国 慰靈碑 内閣総理大臣岸信介】と記されている。碑の裏側に回り込んで思わず息をのんだ。

「シベリヤ事変関係戦没者」小杉二名、(満州事変関係戦没者)龍ヶ谷・小杉二名、(ノモンハン事件関係戦没者)津久根一名、(支那事変関係戦没者)一四名、(大東亜戦争関係戦没者)一一七名。

この小さな村から一五年戦争期には若き一三四名の村民が戦死しているのである。昭和十年十月現在の人口は三二二七名、内、男一五五四名、この内一五歳以上六〇歳以下は七八六名である。残念ながら徴兵年齢に達した人数は分からないが、梅園村の基幹を担うべき大半の力が失われたことは明白であろう。メモをとりながら暗澹たる気分になった。幸か不幸か、町史では私の執筆分担ではなかったので正面からこの重苦しさに向かいあうことはなかった。しかし、鹿沼市史にかかわるようになって軍事を直接担当することになり今度は逃げるわけには行かない。収集した史料により鹿沼市域の特質を明らかにするには、これらの史料を研究史の中に位置づけてゆかねばならない。徴兵された兵士たちがどのように叙述されているのか、取りあえ

ず軍事史の専門家と言われている大江志乃夫の日清・日露戦争史を読むことにした。

いきなり徴兵された一般兵士たちに関する叙述に出くわした。日露戦争は新しい戦闘方法が要求されながら「日本の兵士たちの資質は充分でなかった。：日本の軍隊もまた半封建的支配のもとにある農民から徴収された兵士によって構成されており、軍幹部は戦場における兵士の自発性を信頼しなかった。事実、指揮官の規律ある統制のもとでは：日本の兵士は勇敢であった。指揮官が死傷して規律ある統制が失われたり、夜間や混乱状態のもとで指揮官の統制ある規律が及ばない場合、：しばしば勇敢さを忘れ、組織的な戦闘力を失った」(「日露戦争と日本の軍隊」。優秀な指揮官と自主性のない一般兵士。大江はこの延長線上に戦場における虐殺事件を位置づけている。

戦争することを専門職とする指揮官が勇敢であるのは当たり前であろう。日常の生活、肉親や地域から本人の意志と関わりなく徴兵され、軍隊というシステムの中に強制的に取り込まれ、戦場に送り出された一般兵士が生死の間で時には戦意を喪失するのはなにもその時代に限ったことではあるまい。そこには日常から切り離された一般兵士の恐怖と苦悩がある。越生町の梅園神社で感じた重苦しい歴史はまさにそうした兵士たちの苦悩を碑の向こう側に感じたからである。大江の著作を読んで得た教訓は、自分だけは責任の及んでこない高見から一般兵士を描いてはならないということである。とは言っても容易ならぬ重い課題である。

(京浜歴史科学研究会代表 二〇〇〇年二月一日記す)